文草文集

911.3
ブ

其子俗性内藤氏にして世々尾張の国犬山城主なり武を以仕へ文を以て和漢の道あり若きころ伊勢に帰て武士和尚の禅意をつゝしまを捨て雲水行脚自由自在の身となり一路半化術修行自由業悟徹法を追ふ法師入林五度白雲風月きやるを吾とおもふ孤と云て孤雲庵を結て湖南に草庵龍ヶ岡に草庵をむすび佛幽庵と号し芭蕉翁を開祖とすちくはあり予の学の学と

菊社滅後山之麓にて法華乃報恩とあり
て乃一字の法華経と書写して墳に栄く
元禄十七年甲辰二月廿四日病床にて
紙を堀き筆を乃東林の中にあり西来
菩提とぞ

丈草度白集

春

うぐひすや茶社木畑乃紅りあ
ぜ笑ひのあふちこそつゞ梅社花
床柳さく梅さくうぐひす茶毫
待てとさく梅又ひるるも茶摘哉

李駒

梅うゝや湯を鉢社山茶の切

作屋松の梅ひさかたの烟出し

遥遥の彩まを賀を

水仙を伝ふる清香梅の家

屋敷の思ふを探りて

手元に花ちり初めて雑巾風

芭蕉翁の住居を思ふ

梅の香にまよはぬ道ぞちまたなる

引ずりてもるるものなる柳のめ

我ると鶯の鳴一松竹哉

ちりけるとうとく土用入り

まちひとりなんて金雲ちきや

まちけるとちのこさぬや松とりて

浮戸中ほさえうてうて四隅

里の男の四隅ってと水底を

ぬまち居れ暗とむさぶる

鶯のいくともなく入こりて

入ぬる鶯も死ぬる田ってう

取つのめんてうる陸のめ

梅ちまるまもして

松風をうちこと史陸ち

小菴

火をたてに形よ時あり玉うゑる
の〻猫やうれ行をと柘の中
帰るをまてや柘植のやとの石
生垣結ひ形ら花よ〻く煙所
知らぬ同しひとうの花柘の実

支考餞別

柘風のまゝや花の義あれ
燕の雁と同じや鳴ます
笠文と別るゝとて

蕉翁より上柘植や風中
大原や陸の出てよの霧月
陽炎や陽の葉さゝをゝ
芭蕉翁乃墳又まゐて我高身
をおもふ

かすゝ乃ゝや蕉ゝ乃ゝ外よ行ゝ
まゝゝや行ゝいゝん時時度ゝ
ゝゝさゝや外仕出ゝ此おゝの
為ゝ風ゝゝまゝゝあゝゆゝ
ゝゝ物ゝゝゝゝ一ゝの法の為も

ぶるゆへ之花乃こうさをと蝉ふのこ
性ぬ[illegible]ふ自由ちう蕉翁もわく
是を戯れ四ちう也ーまは人い
つゆうよのこ者と指るくちうとそ
ゆ事ちなくとて俳上の之庵を
訪れる程を居士を山村座
亭ぬ桜にいちる本ぬ神をう
俳ぬ[illegible]ぬ一入ふこそと
後ふ送る故ふのそえて
本桜の俤や伊吹ふ俳る者

閑居

紅夕ふちう火燈や春ぬ[illegible]
白粉ふ月和尚や花の奥
生ちんふ[illegible]桜るんちるさわう
角乃花ふ人とうらやこの友
ふふ剣伶う鄙を侍ーと照て
破死ぬ生ちう花ぬ[illegible]
うくくとまてう花ちんの当ふ居八
者ぬ鶯の家て入る事 山桜
花ぬ田際ぬあとや水ぬ底

死ぬとも花とも水さき庵の花
塗ち榾の灰にまで花つんのく
花ちるや取あひさる山石
水壺につるや花の人出入
片尻を岩にかけて花もし下
ちるうちに志か見えて松竹渡の花
本鳴や松のとさら花の中
笠松にあらそひ花の友
小鳥乃火燵ぬけてや花も下
海棠の花

落こむや花見の中のさまよひ鳥
病中
山のはに花見ともなや枕もと
夕をへや花の陰こそあはれみ
餞別
見送りの先に立ちつくし
咲立て木のをしめや郷
さし取く花へてし行日足かな
あくらうくなかう下や藤の花
書讃

何の業の為て袖ふるく雅なのう
三月や名もの高き紫一本

三月ろう
ぼ夜間ろ日まも行ひしまもの持

夏

時鳥や淀水乃さ濁り
都のかたもきく
子規流るる上のうろこ雲

川越乃渡中まもや郭公
かつきは誰とさんりむ
時ぬるよ京一をい孔けろ
菜種ろ杜乃や聖風の子規
杜鵑ろや桜も梅さから
ろるつて山路ろもの杜宇
山道や蕨ろもしろ千けろ
時鳥
庵近の原入ろや藪の杜鵑
本芭蕉門のろろまて

少し一や蔵うとも川辺
吉野の蔵柿会
芽出しうう三葉の蔵る　柿の実
うう○柏紙　蛇のり果や　杜鵑
まこまや一る紙やまこもる色の蔵る
色猪や蔵井そうく山てうく八
ゐまつれて鳴るまこや吉野の井
芽芋を出るかうる　ゆねまうゆ
もーまこむ色の中や　若ゆ
蛙やうや蔵ゆ　ゆまもー　色のへう

[illegible]

月夜に[illegible]

板元のけいこの中より[illegible]

遊七命寺

筆[illegible]と[illegible]出せ[illegible]

[illegible]や梅田枝把麦蒔[illegible]

[illegible]の株乃麦や稲[illegible]

[illegible]田植[illegible]

[illegible]風や[illegible]田を廻る庵の[illegible]

[illegible]風を[illegible]田の戦き[illegible]

[illegible]や[illegible]川[illegible]

[illegible]柿[illegible]

[illegible]二葉[illegible]柿[illegible]

[illegible]紙蛇の[illegible]杜[illegible]

[illegible]紙[illegible]

[illegible]井[illegible]山[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

豊後龍門寺の滝

篭火や村中まゐる　滝　祇仁

曲水の石を惜

咲ちるを　施てちるをさうし

やらくと出く時はうんこる

仰ぎの里書懐

松の花のちるや水鶏の鳴の間

血をらしとれとたをを鶏のみくを

鶏りさに　鶏の逆ひ

老病信人

りたるの花入りう牧牛の

魯九郎　牛時金焼

牧帳を出く又信ふあうるの月

隙ゆや蚤の出てゆく耳の元

電光さをひ出てや火とう出

梅本寺より帰りて

陳情やわうれて上る　新の山

夕ぐのの上う入る　梅白の

美濃の関を

所中の山や五月の上りまし

白雨ふきすぎて下ぶや井の鐵
夕立ふれのくれ行や　松のく
涼しさよ森ふるや岩のうはさま
小雨ふる山里すゝし　暖れ上
あゝ暑ちやあてて立を吹く夕をみ
て立ち寄る柳や涼み
茶屋乃松めけや漢の立まま
ちゝしさよれんちゝなしてさるし
丈山乃像
さの様ふ翁と無く　松まし

大山ふて市中若熟
涼しさをうせてやうく　地れ松
ぬ市ふ　弼源れあるや　様の月
四梅庵乃弼源
あ所ふのこるちゝみや　梅の中
涼笠ふ立合せちゝ　蓮の葉
浦毎れ頭庵ふ白ふ　蓮ふ
惟徳行脚弼ふて
ちゝふ岩れ　れ
雨乞の百ふ

元禄はかちのうらなる
世ちゆうを仮出しる国府の
旅行
悔るあるてまうまい日ち出の
梅本ちとを出るとて
面をよせんとりつや面影ハ
秋
秋夕遠秋の日てや京の庵
秋ハまて面ハ中や二ツ
蛙言ちをうしハ人をあつ
原言葉の儒あるやや山ち上
意桃や義本とをて月ち新
精言葉し出てうの世の蛙ハ
蓍里を陽て
精言をあるとあるを十年ち
送ち夫の海ハ上るや言ちの
稲言ちハ小て蓍を山の
秋舟ちて酒言ちを

いるつよや　おいて後も　舟こそ後
悔しき人の　さきたちやきくを
月　梅に　ゆ　夜　のきくす
京まてや　こそ　ふる　徳　辞
蒲　のうら　ほ　あや　蓋
こそ　れと　こも　嘗　きこ
きくに　こや　出　の　脱　の下
物　みて　春　や　祝　かく　も
春　こう　ふ　こ　なむ　や　詞　辞
れ　の　ある　に　く　掃　て　知　く　た

房床

虫の音の中に　咲出と　春　ふ
深草の　入　こ　こ　こ　ま　義　ふ　杯
こ　こ　我　菊　と　文　面　の　奥　に
ま　け　も　や　こ　う　ぬ　こ　や　こ　重　房
山　こ　こ　や　て　こ　つ　き　こ　る　鳥　ふ　こ
ぬ　け　う　こ　る　ひ　て　死　ぬ　る　秋　の　詞

旅宿

詰　陰　ふ　十　て　い　鍵　こ　こ　公　の　中
時　こ　ね　で　開　き　ぬ　る　と　し　こ　蒲　の　祝

小嶋の嶋や舟をとゝちこを庫のあゝ
行ゝ行ゝ手を思ひてゝ行る花をうゝ
手稲のゝ雁出ゝ庵乃舟
名りゝ名ゝゝゝゝゝゝゝ風之
名りゝ也車きしらを辻ゝ
辻ゝ之ゝゝてゝ月ゝゝ
戸を吟て月ゝゝゝゝゝ芝の上
ゝゝ稲と海ゝあてゝゝ月ゝゝ
世ゝゝゝつゝてゝゝゝ月ゝゝ
糸ゝ葉ゝゝゝの月ゝ伊仲月

淀川の夕ゝゝて
舟引の道ゝゝゝて月ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ月
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ乃の舟ゝ春ゝゝゝゝゝ

答見ゝゝ山菴

焼ゝゝゝ宿ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

鶏頭にすゝみるや笠の縄
鶏冠乃あかきとつくもめづ秋
つり柿や障子にくるふ夕日影
木つゝきの穴ぬき出る熟柿かな
　落柿舎にとゝまれけるころ
澁柿も加へぬうさけよ明庵哉
落こてよ鳴子の縄や寛政中
居風呂の下や案山子の身の終
借うけし庵能鳴るやよふの葉
　嵯峨路にて

竹伐乃ゆふみへつを菊のぬし
芦の穂や影枯上なる葦さらき
あしの穂や鶏頭をやとひてわもせん
早咲の梅子を桜秋の葉哉
稲積に生るあさしや秋の雨
松の葉の地にさしぬる秋の風
桔梗のこゝのきえとるとてちるや秋の雲
　伊賀へこえし時行とき泊りて
いなむらとも咲秋も秋の空
錦織も秋にとゞかぬ山の上

稲葉をそよかぬる秋の池
まつ虫やなきしもちらさで松の花
帰りきたる魚のむしろや山の紅葉
道路の新芽まて出る梅花の糸
秋の嵐にもさをりて空に雲

須子乃浦

詠あかす秋のあつさや寺と船
月秋や稲葉のつゆ絶尾
行秋の四方を鳴る鴈の声

冬

雪落し松かえの枝の和しくれ
一夜は霰のふりつゝ時雨の雨
早くより沖の時雨の行衛
旅人のしくれ行ぬく津田の橋
鳥の羽もさそうて空のしくれに
尾花の消ところなく時雨の声
鴨こともまかすく日影や村しくれ
風の音や時雨をくる比良の松まて

東湖あるじに手紙をかきて
むかしをとてみや時雨に
うつる菊
越中菊塚を尋
入りゆけばうるさきに底さえ
深山に一しられつきあふ庵のと
一所思
ちるとてもとる花も弱子弱しられ
芭蕉菊高中祈稿の句
ふかこと野のきちひやとろきちひ
きちひ菊高庵又作りて

つくまる蓬ヶ下に立ちさり旅
傷之師に孫娘
晴之の墓しゆくやもろ数
芭蕉菊追悼
ゆうもとに小さの湖や墳の菊
芭蕉菊七日くもらう行
ちるさきを名居又偶居して仙地之
もとにすまるにまるの人中立
行きあも茶場の後乃玉来稿
玉くの墓所七回一蕉葉のもれる

さだめる三日迄に喪服を着ぬ中
湖上乃義仲寺なる某にてとき
あはれなる人々のなみだのつきぬよる
袖の露も一しほにぬるゝとて
さる袖ひ寺乃夕べより終夜とぎて
枕邊吟席のつとめねんころ之
我も聖衲衣いとゞ感ある
ありけれは猶しも孔の向ひ合ひて
うせしあつまて近き谷川乃水を
こゝにあつめて蓮經の要品を寫經

其外菩提をとゝめんの志は
謝せんことを彼の諸子と其の
夏とのしく喪の家に
筆を授りつゝを持して手に
墓前の指図をとふ
石碑に長ちを流して初しれ
芭蕉翁七回忌追福に時は
無量壽經の書あり
待りける經の風の葉なる
水底の岩に落つく木の葉かな

風乃あらぬ事なやこゝ物物

ふる雨ぬ雲物雲物乃

こゝろしの乃ゝ物ゝ物ゝ物ゝ

いつる乃と夢乃てその乃の隙とて

讃ゝ事ゝ乃ゝ

本ゝゝしぬ身ゝ物ゝ物ゝ

むつる山乃ゝ物ゝ物ゝ

山中山

雲乃ゝ乃ぬゝ物ゝ物ゝ

ゝゝ乃の流ゝゝゝ物ゝ

四ゝゝぬゝゝゝゝ歌乃ゝゝゝ

言ゝぬ作隔さひし牛の角と

物乃ゝゝゝゝゝ言乃ゝ

物乃ゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ言乃ゝ

物ゝゝ乃ゝ乃ゝ言ゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

都の人、京より
山をへあるくとやふしをかの
嵯峨の里明ふ荘子
柴折戸や花のうゑ木を客とする
をまつ庵を訪ひ来ぬ
別るとて
雲雀より空の上とは鳴鳥の
村雨乃岩を出るや雲吹の根
ちまき来る雲の黒ゝや雲の間
淋しさ底ぬけて降みぞれ
宇戸口に入れ上ふ
さもある庚申待乃舟を形
水底をゝて来る歌の小野代
花のうゝすをゝやゝ
義経の桜ゝや野の
樹の花や咲ゝ乃ゝ
学庵の火燈のうや 古狸
下京をゝうゝ学燈行
ゝゝと行ゝ

まち屋ふる炭焼こを養のかなるあ
炭屋あるじやくらの山や松もよ
り焼の松を見るりとをとて論して
山やみもよ与ぬの中のもむを焼
岩屋や陽の人う 梅天よ行
紙子ふるてすれ一火焼のてしう炭
貧交
まいをを残ぶの切を薄ろう
一夜さよ物し紙ふしやけてふ
居森さ(うら)負物ろうれを

立別ふし右外改しさこそと思て
踏やふる紙帳の立やそむを屋
窮孔注笠てやふこも
ちつきを数陳し思を弼代
舟思よ新水をや沫まき
一月ふうれよ第ろせてちてき
門の出にひくくや紙敬
長崎市七渡島集の時
白撰やをそれ降夜のあれ河
水風呂よ筆一ふを谷の集

[illegible]月の桂聖[illegible]あるしうら
神松乃さえこむ影や福屋の夏
黒海苔を言海苔とも不出
問る降つゝ[illegible]言のりを思き
[illegible]くはあとをとゝ[illegible]流
[illegible]
海苔の名や半くちんをを言と言
[illegible]猶[illegible]出[illegible]
言[illegible]白[illegible]の月
[illegible]

煙[illegible]や山風うけて吹通し
[illegible]
[illegible]に[illegible]
十[illegible]
行[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

帝国図書館
第 6631 受入
昭36. 3.

西京津要巡山之京のおもしろさ
廿前に書れし
名月は前へ白雲や松よくら
賀助発句山彦撰集
月花やきこゝろある里の山

栄茶屋下蔵書